平成２８年度　第２回釧路市まちづくり基本構想策定市民委員会
議事要旨

１　日　時　平成２８年１１月２５日（金）
　　午後３時００分～午後５時１０分
２　場　所　釧路市役所　防災庁舎　５階会議室Ａ
３　出席者
（１）委　員：浅野委員、伊藤委員、井上雅敬委員、大嶋委員、
　　金子委員、川村委員、口田委員、小磯委員、西村委員、
　　畑委員、檜森委員、松尾委員（五十音順）

（２）釧路市：蝦名市長、名塚副市長、岡本総合政策部長、
　　菅野都市経営課長、太田基本構想主幹、平間主査、
　　沼尻主任、永田主任
４　内　容
（１）開　　会
（２）会議成立確認
（３）市長挨拶
（４）委員長挨拶
（５）議事
①釧路市まちづくり基本構想等策定に向けたアンケート結果報告
・資料１に基づき、事務局より説明。
・意見、質問等なく確認された。

②釧路市まちづくり基本構想　骨格について
・資料２に基づいて事務局より説明。
・意見、質問等なく確認された。

③釧路市まちづくり基本構想　目指すべきまちづくりについて
・資料３に基づいて事務局より説明。
意見交換
（○は委員の発言、◎は委員長の発言、●は事務局の発言、
以下同じ）

◎この基本構想の大きな目標である「目指すべきまちづくり」について、事務局からたたき台の提案と説明があったが、アンケート調査やこれまでの説明を受けて、各委員より意見を頂きたい。

○まちづくりへの参加意向が思ったより高いと感じた。まちづくりは地域住民から始めるものだと考えているので、地元を愛する気持ちが一番だと思う。足元から少しずつ盛り上げていくことが必要ではないか。それを定着させていくことで、「帰ってきたいまち」になる。小さい単位だが、自分の住んでいるまち、まずは地元の小さな地域から活性化させて、市内全体の活性化につなげていきたい。

外から来た方が「釧路はこんなまち」というＰＲをすることも大事だと思うが、まずは住んでいる人がどれだけ釧路を愛せるかが重要だ。そして何か行いたいと考えている方が沢山いることに自信をもったので、色々なことを地域一体で行っていきたいと感じた。

◎委員からまちづくりへの参加意識という話題がでたが、ソーシャルキャピタルという言葉がある。人々の思い、意識の高さはアンケート結果から探れるこの地域の力であり、これをどうやって顕在化させ、地域に伝えていくのかが、基本構想の大事なポイントだと感じた。

○アンケート調査の釧路の弱みが産業であるという結果は予想した通りである。産業は相手が企業なので、市としても取り組んでいくのが難しい部分もあると感じる。釧路に住みたいという若者がかなり居るという結果からは、昔より高学歴高収入という意識が減ってきており、自然を愛するなどの考え方も出てきているのではないか。産業に関して水産について述べると、水産業は幅が広い。生産者、市場、仲卸、加工などに分かれるが、今の若者はどちらかというと夜型だが、市場関係は朝からの仕事なので、活動時間が違うことで就職のミスマッチがあると聞いている。

また、生産者は通年の仕事がなくなってきている。時期に隙間があることを原因とする離職や、高齢化による廃業の問題が出ている。

次に観光というテーマがあるが、食と観光と一体化、土産としての水産物という点で関わりがある。かつての水産は量で供給すればいいという考えだったので、現在は色々な提案をするが、企業の場合、採算ベースに乗らないというのが第１に来るので、なかなか貢献できない部分がある。難しい問題だが、市がある程度、音頭をとりながら新しい産業をつくっていく、新しい仕事をつくっていくことが大事ではないか。

○目指すべきまちづくりたたき台だが、１つ目の活気ある経済の下で働ける環境が整った安全安心なあたたかいまちを目指すということだが、活気ある地域経済をどのように目指していくのかが非常に心配である。仕事を考えるときに、個人個人の能力の差や身体的な差の問題、イノベーションなど効率化を求められると仕事は減ってきてしまうのではないかと心配している。建築士会では、高校で出前授業を実施しているが、同じ内容でも学校によってとらえ方が違うなど、仕事の多様性を感じる。

釧路市として、どのような形で若者に仕事してもらえばいいのかについて考えていく必要がある。それは市の責任でもあるかもしれないが、民間企業の責任も大きいと感じている。仕事がしやすい環境がどのようなものなのかという点は大きな課題だと思うが、釧路市として優位だと感じるのは環境である。涼しい環境にあることは企業誘致の場面でも、「冷房をつけなくても仕事ができる」というのは大きな利点であり、都会にいなくても出来る仕事も多くなってきているので、そのような企業誘致も必要だと思う。ＩＴ関係の仕事も釧路で環境が良い分、仕事もしやすい、効率も上がることもあると思うので、色々な可能性を考えて、企業誘致をすることによって若者の働く場が増えるのではないか。

一方で若者に目線が行きがちだが、これから高齢者の方が増えていく。その中で、元気な高齢者の方に働いてもらい、まちを潤していくのもひとつの考え方ではないだろうか。元気な高齢者にどのようにまちに貢献してもらうか考えていくという、

例えば、アクティブシニアの方々に経済やまちづくりなどに参加してもらう取り組みも必要ではないか。わかもの、わかものとは書いてあるが、そういった方々にも目線をむける必要があると感じた。

豊かな自然や多様な文化について、釧路の場合は先人の文化やアイヌの方々の文化などが織り交ぜられた多様性が宝だと思うが、一方で歴史についてどう考えているのかが気になった。先人達が釧路をここまで引き継いできた様々な歴史の検証が大事なのではないか。それを礎として発展してきたことを忘れずに、未来につなげていくことが非常に大事ではないかと思う。

産業に関してだが、今、釧路市を挙げて行っているのは観光である。観光を産業と捉えた時にどこまで伸びられるのかを考えると、インバウンドであるとか、もう少し積極的に踏み出す力が必要だと感じる。釧路人は謙虚だと聞くが、貪欲さがないと感じる。例えば、クルーズ船をチャンスとして、早くから店を開けたらどうだろうかとか。そういった貪欲さが釧路の人にはみられないような気がしている。そのような行動を自分のためだけではなく、まちを元気にするために、まちに対するサービスとして行うという視点も大事だと思う。

市民一人ひとり、自分が自分のまちを良くするという自覚を持つことが大事だが、市民と市が頼りすぎるのは良くない「それは民間」「それは行政」と分け隔てて考えるのではなく、お互いにきちんと意識し合うことが重要だ。

◎将来のビジョンを考えるにあたって、やはり、これまでの先人に学び敬意を払うことが、政策では大事であると感じた。

○アンケート結果で中学生の愛着の度合が高いことに驚いた。進学先とか仕事の関係で転出したいという回答が高くなっているので、１０年後、２０年後にどうするという視点で切り替えていく必要があると感じた。また、学校生活や周りの大人などと良い関係でいるからこその愛着だと思うので、人とのつながりというのがキーであり、戻ってくるきっかけになるのも人がキーワードになると考えている。まちづくりへの参加意向も非常に高いが、各団体が活動の内容をお互いに発信し合うことがあ

れば、「これならできそうだ」というような参加のきっかけになると思う。地域包括支援センターで高齢者の方を対象とした仕事をしていると、「昔は商店街も色々なお店もあったし、学生もいたし、変わった」という話をよく耳にする。一度は終わってしまったが、振り返って、まちを新しくつくっていこうという意識が年齢問わず共有していければ、また違う発見があるのではないか。

医療、介護、福祉の領域の方との関わりが多いが、１０年、２０年前と比べて企業の地域貢献という認識が高まっていると思う。そこで、企業として何ができるのかという視点や職場におけるまちづくりへの意識をつくれると、地域の一個人としてまちづくりにどう関わるのか、という部分につながっていくと思う。

◎民間企業の力を地域の政策としてどう生かしていくのかについては、都市政策では大事な点である。そういう面では目指すべきまちづくりのたたき台の３番目にある都市経営については、釧路らしいものである。その中で、ひとのつながりをきちんと考えていくということかと感じている。

○アンケートの愛着については良い数字だと思うが、他の都市と比較した場合にどうなのか。例えば釧路市民の場合、とても愛着を感じているが３０％くらいだが、他の地区や隣の市が５０％であったら大きな問題である。中学生アンケートも愛着について６６．７％と高く見えるが、他都市は９５％が普通ならば問題だと思う。中学生アンケートで市外に転出したい理由として、進学したい高校や大学がない、将来やりたい仕事がないということが示されている。これは大事な問題だと思うが、だからといって、良い高校、良い大学を作ればいいということではないと思う。もちろん、開設には非常にコストもかかり、アンケートの結果が出たから作るとはならないと思うが、逆に一度、高校、大学、最初の社会人で外に出て一回経験してくれていいのではないかと思う。いかに釧路に戻ってきてもらえるようにするとか、どこかに特化して力をいれる考え方が大事だと思う。たたき台の他の部分も同様であり、例えば生まれて育っ

て暮らし続けられる地域を作っていくにはどうするのかという論点だが、お産がしやすい都市づくりにまず特化するなど、順序づけを考えていくべきではないかと感じる。

雇用の創出という産業の強化に関しても、雇用を多く生む大きな会社を誘致していくことと、例えばあまり大きくなく、お金が沢山稼げなくてもいいが面白い企業やソーシャルな企業などを誘致していくかで考え方が変わってくると思う。これも両方となると、難しいので一定の範囲で決めて力を入れていくのが大事ではないか。個人的に有望で競争力のある分野だと思っているのが、釧路の夏の涼しさである。夏場の長期滞在者はこれから大事になると思うので、酪農業界でも来釧した人達にどのような体験をしてもらえるかについて考えている。長期滞在者アンケート調査の回答率が低いと感じた。せっかく来ている長期滞在者の意見は貴重な情報源だと思うので、ここの回答率を上げる努力が必要ではないか。産業について、まず、大きな強い競争力のある分野を伸ばしていき、それから足りない他の部分を補っていく考え方も必要だと思う。

これまでの議論で感じたことだが、色々な業界で課題に対して取り組みを行っているが、自分の業界だけに留まってしまっている気がする。業界同士で横のつながりがあると良いのではないか。さきほど出前授業の話があったが、我々も出前授業を行っているが、他の業界の方々が行っている出前授業の情報が分からない。他の業界と一緒にやれることがあるかもしれないので、横のつながりを作って連携して何か特化した分野に力をいれていくことも大事ではないか。

◎最初に、アンケートの他の地域との比較という重要な指摘があったので紹介すると、定住意向に関して過去に同じ内容でアンケートをした際に７０％台という高い数字で、釧路市民の意識が上がったと感じた記憶がある。今回は８１．６％であり、高い数字ではないかと考えている。ちなみに北海道で釧路と同規模の都市で２年ほど前に同じ設問の調査をしたところ、７０％台の前半だった。そういう意味で釧路の定住の意識はかなり高いという認識で間違いないと思う。

○アンケートについては中学生の回答に注目したい。中学生はこれから社会を担うので、幼い内容かもしれないが、実は、先を考えるときっと活かすことができる意見が沢山あるのではないかと感じた。幼稚園という職種の立場なので、母親や子育てのことについて発言したい。今子育てしている母親の「子育てと仕事を両立させたい」「子育てしながら自分も社会で仕事がしたい」という気持ちをつぶさない環境を充実させることが大事だと感じている。１人子どもを産んでみて「子育ては大変、でもやっぱり自分も社会参加したい」と思っている中で、社会復帰がスムーズにできないというジレンマを抱えている母親は、もう一人生みたいという気持ちにはなれないと思う。「子育ては大変だ」「育てていくのは大変だ」と感じて終わってしまう。前回の委員会でも話したことだが、初めてお子さんを生んだ母親が、もう一人、もう二人産んでも育てていけるという気持ちになれる環境が充実していくと良いと思う。結婚して自分が仕事を続け、妊娠、出産、子育てを行い、そこから社会に復帰したいと思っている母親の大半が元の職場環境に戻っていないのが現実である。子育ても仕事も大事と考えると１００％戻れるというのは不可能かもしれないが、子育て中の母親は自分の将来も不安に感じている。母親が希望の持てるような職場環境に戻れると良いと感じている。

　仕事をしている母親は子どもが病気になったときのことを不安に感じる。仕事は簡単に休むことはできず、そのことは母親が一番理解している。また、時期になったら幼稚園がいいのか保育園がいいのか、小学校に入ったときは学童保育についてなど、母親の中に次から次へと考えなければならない材料が出てくる。例えば、職場復帰して、まだ幼稚園保育園の子どもがいる母親が切実なのが病後児保育の充実であり、子どもが熱を出したので早退したいとか、休みたいと言えない職場もある。その時に子どもを預けてでも「仕事に行っておいで」と後押ししてくれるような人や場所があれば良いと考えている。ファミリー・サポート・センターを使って、その中で看護士の資格をもっている方が、家の中でも一人でも預かれる制度が広がるなど、子どもを産んで働きたいという母親を後押しするようなシステムができれば良い。

○アンケートではまちづくり住民活動参加の意向にとても関心がある。機会があれば参加するという割合が大きいところが一番気になり、積極的に参加したいという割合を増やしていくことが重要だ。地域住民の活動を広げる仕事をしている立場として、この数字に注目している。参加するきっかけづくりをどうするのか、これからの高齢者の話も出ていたが、その部分での人材育成も重要な一方、次の世代の子どもたちにまちづくりの地域活動に参加してもらうのかが大切な視点だと思う。アンケート調査では参加したい活動には福祉教育分野の内容もあるので、我々としてもさらに推進していきたい。

目指すべきまちづくりのたたき台では、２項目の地域の担い手育成が一番関連してくると考えている。まちづくりにどう参加していくのか、また、そういう意識を持てる住民をどう増やしていくのかという中で、地域福祉活動や町内会活動が子どもたちに引き継がれていないと感じる。自分は４０代後半であり、地域の町内会活動では父親や地域の人がいる環境で育ってきた実感があるが、今はそういったことが少なくなってきている。様々な場面で機会づくりを行い、地域活動では世代交代して繰り返して続けていくことが大切である。それには福祉教育や企業の関わりなど、釧路市全体で子どもを育てていく中に「地域の中で活躍できる人材を育てる」という視点が必要だ。私もＰＴＡ活動などの機会があるが、最近学校も土曜活動で地域のつながりを増やしてくれている。教育委員会の協力の効果もあると思うが、福祉以外ところでも各学校色々な部分で繋がりが出来ている。先ほど言った様に子どもたちにとって地域活動が見えるという点からも伸ばしていく部分だと感じている。

また、ＰＴＡ活動についても、皆さん参加できない理由に仕事を挙げている。企業や職場の中で、地域貢献活動、企業の社会貢献、そしてボランティア休暇など、より一層地域活動に参画しやすい環境づくりへの理解を深めることで勤労世代が地域活動に参加していく場面が広がっていけばよいと考えている。

○アンケート調査から、まちづくり活動に参加しても良いと考えている人がこんなにいることは正直驚きである。町内会活動や色々な地域活動でご苦労されているという話をよく耳にする。活動し

たい、参加したいと思える様な活動が必要なのかも知れない。参加したいと考えている人が多くいるという事は、例えば、町内会にしても従来型ではない仕組みが求められているのではないか。学生や働く世代あるいは家にいる子育て中の母親も参加したいと思える、今までとは違う地域参加の形を考えていければ良いと思う。例えばテレビで紹介されていたが、コミュニティスペースなどに自分が料理をつくって持ち寄って、お茶飲み会を手軽にやるものが意外に上手くいっている。このような従来型ではない新しい仕組みを作るためのいいきっかけではないかと感じた。

たたき台についてだが、第１回の委員会で、若い人が帰ってきて仕事をして、それが継続することが釧路で成り立つには何が必要なのかをお話ししたが、就職できなければ釧路に帰ってきたくても帰って来られない。そのためには、第１に産業基盤の拡大が必要であり、企業活動の充実が重要である。その次に経済が循環して雇用が生まれて、帰ってくることが可能となる。今現在釧路では、誰かが辞めないとポストが空かず、採用しないというのが基本システムで、かなり厳しいと思う。やはり、先立つ経済活動の充実が重要である。先ほども意見があったが、釧路の強みである自然環境を武器にして新しい産業を呼び込むことも１つの方法だ。一方で、今ある地域の会社に働きたいと思う人がどれだけいるのかが問題だと思う。今の若い人は、なぜか正社員で勤められる小さな会社よりもちょっと見栄えのいい会社の嘱託採用を選ぶ。小さな５人、１０人の会社でも良い会社は沢山あるが、大卒の人は、見向きもしない状況である。そうではなくて地道に地域の小さな会社でも働いて、暮らしていけると感じてもらうことが重要だと思うが、就職活動をしている高校生や大学生は全くわかっていない。そういう状況では釧路に就職先があっても、ないと判断してしまい札幌や東京に就職してしまう。求人はあるので、もう少し意識改革してもらえる取り組みが基本構想に盛り込まれると良いと思う。

◎昔は地方に仕事がないから戻って来られないという単純な話だったが、今は地方も人手不足であり、仕事がある。このことをどのように政策にしていくのか、雇用対策、雇用のミスマッチ、魅力ある働き方を地域でどれだけケアしていけるか。それがこれからの時代の中長期計画の課題であり、まちづくり基本構想の中で非常

に重要な問題である。

○中学生アンケートのまちづくり活動への参加意識が９０％台と高い結果となっているが、分母が５１人なので、中学生全員を対象とするとまた違う数字になると思う。しかし、中学生のまちづくりへ参加したいという意見は大事にしていきたい。意見を吸い上げるような場所があれば良いのではないか。

地域の人口が減りすぎである。なぜ人口が減るのかはいろいろ要素があると思うが、現実の所では不足している産科医、小児科医を増やし、安心して産める、安心して育てられる環境を作ることが重要である。また、看護学校を見ても、間違いなく学生が減っている。また医師会でも、こんなに少子化が進むと思っていなかった。冗談かもしれないが、ドクターの奥さんや家族は買い物する場所もなく、イベントも帯広くらいまでしかないなどの要因で釧路に来ないと聞く。人口をもっと増やすことを考えなければいけない。

もう一点、介護の問題がある。どうやって、この地域で終末を迎えるかが具体的に人生設計の中に浮かび上がってこないことが不安につながっている。

○行政として若者のために環境を整備することに関してだが、子どもたちが大学、専門学校とか、とにかく釧路にないもの、自分の夢や希望の実現を求めて外に出て行って勉強し、戻ってきて学んだことを充分活かしながら新しく企業を立ち上げてもいいし、今ある企業で頑張ってもいいと思う。そのためには戻ってきて働く場や住環境などの要因があると思うが、準備してもらうだけではいけないのではないか。子どもたちが一体何をしたいのか、どのようにここで生きていきたいのか、自分で前向きに考えていくことが大事だ。そのためには家庭環境も含めた地域との関係づくりが重要であるが、現状ではできていない部分が多いと思う。

町内会の話も出ていたが、地域と自分の関わりや地域を知ることが大事である。住みよい地域づくりをしたいと考えていない人は町内会などの行事には参加しない。清掃活動にしても数年前までは親が子どもを連れて一緒に参加する光景がどこでも見られたが、今はほとんどない。しかし、家庭でできないのなら学校でということで、地域ふれあい清掃活動を行っているところもある。公園

の清掃をしながら、おじいちゃんやおばあちゃんと話したり遊んだりしている。行事への参加は一つの例だが、小さいうちから自分の住んでいる地域を見せて、できることはさせて、家庭でも企業でも色々と子どもに関わらせ体験させることが必要だと思う。

釧路に帰ってひとつ頑張ってやろうという若者が出てこないと、明日のまちが不安だ。

○水産業が盛んなある村では、収入が１，０００万円を超えており、高級外車が走っている。収入が安定しており、産業基盤が強ければ辛くてもその仕事に人生をかけることができる。そこではピアノコンクールの全国大会で優勝したなどの話を聞くが、親の収入が安定していれば、教育にお金をかけられるということだと思う。

アンケートの中でまちづくりへの参加意向を見ると、「積極的に参加したい」が減っていて、「参加したくない」が増えている状況であり、むしろまちの活力が減っているのではないかと感じている。それが町内会活動や除雪活動に表れているのではないか、除雪を受託している建設業の方々から、除雪に対する住民要望が大変多く、心を病んでしまう従業員もいると聞いている。

一方、明るい話をすると、出張で札幌に行った際に、この春に釧路から札幌に転勤した方とお会いしたが、初めて前任地に戻りたいと思った街が釧路だということを聞いた。理由は聞かなかったが、おそらく食べ物や街全体の印象とか人づきあいなどがあるのだろうと思っている。まちにそのような長所があるなら、伸ばしていくべきだと感じた。

職業観については、人手不足が全般的な状況であるのに対して、ホワイトカラーの仕事に人が殺到している。ある団体の月収１５万円の嘱託職員の求人に対して、１週間で３０人もの応募があったと聞いている。建設関係や介護関係では全然人が集まらないと聞く。そのような状況に対して、家庭教育や社会教育の中で職業観を変えていかないと持続可能な社会にはならないのではないか。

北海道の中小企業課長から「中小企業の年間の廃業率は５％で、起業率は３％、差の２％は企業が減っている」との説明を受けたことがある。統計数字から見るとゆゆしき問題である。廃業の裏には、あとを継ぐ人がいないという理由がある。

○外から稼ぐという点について、例えば、釧路の大きなイベントやお祭り、港まつりや大漁どんぱくの開催によって、地域の消費額として市民、外から来る人などのデータは市にあるのか。湿原マラソンも各地からランナーやボランティアなど多くの方が来ていて、良いイベントになっていると感じる。地域住民や地域外の人も参加でき、地域の人が見物するだけでなくて、自分たちも手掛けていると感じるものがあれば、さらに盛り上がると思う。外からどれだけ稼げているかが気になった。

◎以前の調査で、観光収入は２００億円を超えることが分かっているが、地域でお金が消費されればよい訳ではない。例えば、宿泊先などで出される料理の材料などが、地元の漁業者や農家が作ったものならいいが、地域の外から材料を調達してしまうと、その瞬間にお金が外に流れていく。そういう戦略を組立てることが都市政策の大きな特徴であり、釧路市においては都市経営戦略プランの政策プランが示す域内循環であって、総合戦略にも引き継がれている。また、この新しいまちづくり基本構想にも継承されていく。

○域内循環に関して、酪農業界の生産量はかなり規模があるが、餌の原料については、牧草は地元産であるが、カロリーの大きなトウモロコシは大半を輸入で賄っている。牛乳の自給率は１００％近いのだが、原料ベースで考えると低い。地元で調達できる餌への消費者の理解が高まれば、多少牛乳の値段が高くても地域で循環するのではないかと感じている。

　働き方に関しては、若者の意識改革も大事だが、例えば、まず２年だけ就業してみるとか、やってみて面白くなければ別の所で働いても良いし、酪農で考えると、牛乳を絞るのが面白くなければチーズを作るとか。期間限定など自由な雇用体系を受入れられる仕組みが雇う側にも、特に地方では必要だと思う。

◎目指すべきまちづくりたたき台に対する意見を少し整理してみると、ひとつ大事なのは、行政の政策の中でとりわけ経済・産業への市民の関心が高いことは特徴であり、また、釧路市の弱みでも産業となっている。これらを考えると、産業という政策にどのよ

うに反映していくのかが基本構想の中でも重要である。さらに、雇用にどうつなげていくかも大事である。釧路市は生産都市を標榜していることからも、生産・産業と釧路市の都市政策は実は密接に関わっていて、それをまちづくりというコンセプトの中にどのように目標を置くのかが大きなテーマだと感じる。

また、今回のたたき台のなかでは若者世代、次の世代、若者への議論が多く盛り込まれているが、一方で委員からの意見では、これからはシニアの世代も元気に地域に参加していく、世代と世代とのつながりを意識するなどが出された。やはり、釧路市を幅広く見据えた議論が大事だと感じた。それから産業面では現在、観光振興ビジョンを策定しているが、これからの釧路市を担う産業としての観光については、釧路市の持っているポテンシャルの高さを考えると、政策の上位体系にある基本構想の中でしっかり位置付けて議論することが重要である。

最後にたたき台が示されたが、今日の議論で完成するのではなく、今後、説明がなされる具体的な施策の議論の中で振り返りながら、改めてこの目指すべきまちづくりを整理していくという議論の進め方が大事である。

④釧路市まちづくり基本構想　まちづくり基本方針について

・資料４に基づいて事務局より説明。

・意見、質問等なく確認された。

（６）市長の感想

先ほど委員長からも話があったが、まちづくり基本構想の１０年を進めるために、しっかりと雇用について考えることが重要である。経済に関しては、これまでは国が行うものという意識だったが、やはり地域が考えるものである。同じく雇用についても、日本の場合は国が専管しているが、世界では地域が所管している実態もあり、大きな違いがある。地域が情報を適切に出すことで雇用に結びつけていく。産業・経済や雇用について地方自治体の取り組みを進めていければと考えている。

また、いざ大学を卒業してみたら地方に帰って来ないという話があったが、今、道教委を含めて、教育と連携し、高校生にこのまちにどのような仕事があるのか、まちに残るためにどんな事を勉

強したらいいのかなどを伝えている。しかしながら、子どもは都会に憧れるものである。そこは都会に行ってみて、例えば思い通りにいかない時に、お話ししたことを彼らが思い出すことによって、地元でのチャレンジにつなげていく。あるいは経済界がお盆と正月の子どもたちの帰ってくるときに情報提供をしているが、もっと早い段階から行うなど、色々な取り組みができる。そのような意味で、産業・経済、そして雇用について市役所を挙げて取り組み、成果を出していければと考えている。

もう一つ、子育てについてだが、子育てやその環境づくりについてはこれまで国の基準でやってきている。しかし、子ども・子育て支援新制度の施行により、子どもたちの環境づくりの実施主体は地方自治体となった。これからは、国の基準だけに基づくと他地域よりマイナスになってきてしまうため、根本的に見直しながら、進めていきたい。

そういった環境を整えていきながら、しっかりと経済、雇用にも結び付くように、まちづくり基本方針に基づいて市役所の組織が一致結束して進める体制をとっていきたいので、力添えをお願いしたい。

◎雇用に結び付く施策を続けていくということだが、まさに今、国が働き方改革と言っているが、地方にとっては国の政策をそのまま受け入れるだけでは、課題は全く解決しない。地方として働く環境づくりをいかに作り上げていくかというところを基本構想で示すことができれば良いと思う。

（７）その他

・ご意見シートについて事務局より説明。

・次回日程について事務局より説明。

５　閉会